

乾癬患者さんの「気持ち」と「暮らし」に寄り添う情報誌

feeling

心もうるおす
緑のある暮らし。

2018
VOL.4

feeling



Index

03 ... Special Dialogue

聖路加国際病院 皮膚科 部長 新井 達 先生
添川 雅之 さん

小さな成功体験を
重ねることで、
悩み多き日々から抜け出す。

07 ... Doctor Talk

東邦大学 心療内科 教授 端詰 勝敬 先生
はしろクリニック 院長 羽白 誠 先生
名古屋市立大学病院 皮膚科 講師 西田 絵美 先生

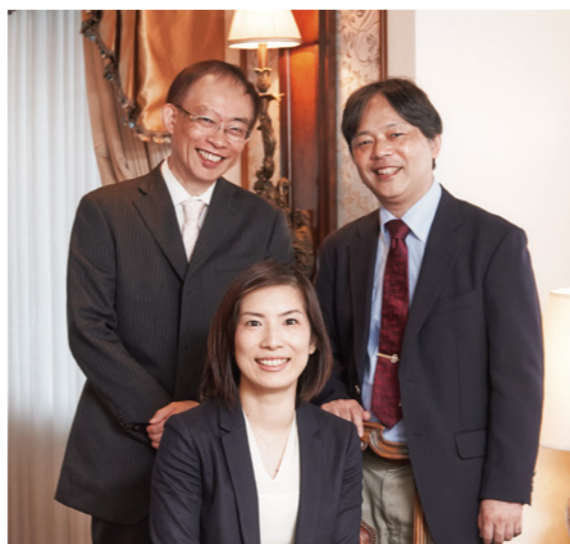
わたしたちは乾癬をこう診る。

— 心療内科 心療皮膚科 皮膚科 —

11 ... Comic Essay

東京逓信病院 副院長兼皮膚科部長 江藤 隆史 先生

「乾癬と歩んでいます。」



12 ... LIFE 住 [LIVING]

インテリアコーディネーター Teruさん

乾燥対策に、
緑のインテリアを使って。

13 ... 患者による「日本初」の 世界乾癬DAYイベントを開催!

14 ... Information

「みんなで学び・みんなで支える」
— 日本乾癬患者連合会 —



Feeling

患者さん一人ひとりが、
毎日をもっと自分らしく暮らしていけるように。

乾癬の治療がここ数年で飛躍的に進歩し、

患者さんはご自身に合った治療法が選択できるようになってきました。

しかし、その一方で、乾癬という病気がまだ十分に理解されていないため、

患者さんは病気に対する誤解や偏見に悩むことが多いのが現状です。

さらに、患者さんの数も少ないため、

毎日の生活に役立つ情報が少ないという問題もあるのではないかと感じています。

そんな患者さん一人ひとりに対して、お互いの共感の輪を広げ、

日々の生活を少しでも楽しいものにできる情報提供の在り方はないか考えてみました。

その一つの答えが、この情報誌「Feeling」です。

生き生きと活動する乾癬患者さんの紹介を始め、専門の先生方のご意見、

また日常生活におけるちょっとしたヒントや楽しみ方のコツなどについて取り上げています。

この冊子を通じて、患者さん自身に、そして周囲の人々に、

新しい希望や今までとは違う毎日を感じてもらえるようになって欲しい、

そんな想いが詰まった一冊です。



Special Dialogue

小さな成功体験を 重ねること、 悩み多き日々から 抜け出す。

聖路加国際病院 皮膚科 部長
新井 達 先生 × 添川 雅之 さん

7年間にわたる 入院の繰り返しで 社会から置き去りに されたと落胆

添川さん：私が14歳のとき、肩にゴインくらい小さな皮疹ができました。これが乾癬発症の始まりでした。そして22歳のときに全身に広がり本格的な乾癬の治療を開始。28歳のとき関節炎を伴う汎発性膿疱性乾癬となり、それから復職する34歳までの7年間、膿疱性乾癬で入院を繰り返しました。

で悩んでいました。どんな治療をしてもなかなか回復せず、ジワジワと悪化。いわゆる治療疲れをしてしまい、治療意欲が極端に低下することもありました。するとさらに症状は悪化するという悪循環にはまり、精神的に落ち込んで自己嫌悪に陥り、モヤモヤとした毎日を過ごしていました。私は膿疱性乾癬なので、微熱、倦怠感、皮膚の痛みが悩まされ、また社会的には自分の立場についていけず、悩まされました。7年間の空白を経て復職したとき、同僚は結婚していたり、肩書がついたりして、未来に向かって明るい話題にあふれていました。自分とはずいぶん差が開いてしまったと思つたものです。そして社会から置き

去りにされたような気持ちになり、やがて、自分の存在理由がわからなくなるなど、精神的にかなり追い詰められた時期もありました。

新井先生：添川さんが入院された頃は、膿疱性乾癬の治療には長い時間が必要だった時代でした。7年間はさぞ辛かったことと思います。添川さんもおっしゃっているように、患者さんにとって、人から見えないところに乾癬の症状が出るのはとても辛いことですし、皆さんそれぞれ気にされている部位も異なりますから、我々医師は患者さんの訴えに耳を傾け、場合によっては生活の背景まで知るなど、患者さんについてよく理解して治療に当たることがあります。たとえば名刺を渡すこと、多い営業職の方なら手の症状を、人前に出ることの多い接客業の方だと顔とか額の症状を抑えてほしいと訴えてきます。とても気にされているだけに、その症状が改善すると、皆さん表情がとても明るくなります。このときは、我々医師も同じようにうれしい気持ちになるものです。



前向き思考で 成功癖をつけると 流れが好転

添川さん：社会復帰した当時は、毎



聖路加国際病院 皮膚科 部長
新井 達 先生
皮膚科全般に加え、乾癬を専門に診療。モットーは「いつも親身になって患者さんと向き合う」。聖路加国際病院皮膚科は「認定NPO法人 東京乾癬の会 P-PAT」の事務局でもあり、乾癬患者さんとの交流も深い。

日つかない顔をして過ごしていましたが、気分を変えたくて買った新車が盗まれたり、全身麻酔手術が必要なものばかりが続きました。こんな生活から抜け出したい…そんなことを考えていたのですが、あるときクヨクヨしてばかりでは仕方がない、ある種、開き直る気持ちが必要ではないかと思うようになりました。そして、今できることを一つずつ解決していけば、きっと1年後には好転している」と考えるようになったのです。すると不思議なことになりました。前向きな気持ちに対する追い風が吹き出し、今度はいろいろと良い出来事が舞い込み、小さな成功体験を積み重ねる自信を取り戻すことが

できました。もう1つ私を前進させてくれたのは、患者会の運営に携わってきたことでした。以前に東京で乾癬学会が開催されたとき、お世話になっている先生や当時すでにあった他県の会の方から「東京でも患者会を開いたら」とアドバイスをいただき、それをきっかけとして東京の会を設立しました。よく「ボランティア活動をして偉いですね」と言われることがありますが、人の気持ちに思いを馳せるのはめぐりめぐって自分の心を癒やすことにもなっています。

新井先生：会の活動は添川さんの喜びであるとともに、情報が行き届かない患者さんにとっては、より積極的な

医師はいつも

患者さんを照らす太陽で

ありたいですね。



治療を受けるための動機付けになって
いると思います。治療を通してその患
者さんの乾癬が改善すれば、今度はそ
の方が新しい方を会に連れてきてく
れる、そういった好循環にもつながり
ます。これも添川さんの喜びになって
いるのでしょうか。

添川さん：感謝されたいわけではあ
りませんが、それでも「ありがとう」と
言われると素直にうれしいですね。そ
して、たとえ病気であつても自分が不
幸だと思ふ気持ちが薄れて、「幸せ
だ」と感じることもさえます。

まずはじっくり 患者さんの 悩みに耳を傾ける

とは、患者さんも乾癬についていろ
なことを考えるようになるため、前向
きな治療につながると思います。

医療者任せの 治療からの脱却

添川さん：主治医との出会いは大き
なポイントですね。私は何人かの先生
から治療に対する考え方を学びまし
たが、その先生方と出会っていなかつ
たら、今、全然違う状態になっていた
と思います。治療について自分も興味
を持ち、主治医の先生と共に自分自
身に合った治療法を探していくこと
が大切だと思います。これが医療者
任せで、さらに治療効果が上がらない

新井先生：医師は治療を通して患者
さんが立ち直るのをお手伝いします
が、そのためには患者さんの悩みを的
確に捉える必要があります。私が診
察した患者さんの1人に、「お米が研
げないで困っている」と訴えてきた方
がいました。その方は全身に発疹があ
るのですが、関節炎の症状はないので
何故できないのだろうと詳細を聞い
たところ、手に薬を塗ることや鱗屑が
落ちることもあつてお米が研げないと
いうのです。そして「なかなか治らな
い、自分は歳だから生きている価値が
ない」と悲観されていました。本来は
明るくて気さくな方なのですが、乾
癬の症状のためにとても傷心し、ネガ
ティブな発言をされていました。私は

と、理由がわからない不安が先に立
ち、医療機関を転々とするなど医療
不信に陥ってしまうこともあるかも
しれません。前向きな治療に取り組
むことで、成果が出れば主治医と喜
びを分かち合い、成果が出なければ、
再び自分に合った治療を主治医と共
に探していく。これが大切だと思います。

新井先生：いつも患者さんを照らす
太陽でありたいですね。短時間の
診察であつても、「ここにきてよかつた、
1つ知識が増えた、そう思つて帰つて

一緒に改善に向け治療しましょう」と
励まし、実際に患者さんとの治療
が現状の生活や症状に合っているのか
を話し合い、一緒に治療を選択しまし
た。その治療を続けた甲斐もあつて、
症状は改善し今はお米も研げるよう
になりました。他人が聞けば、お米が
研げないことくらいでと思うかもしれ
ませんが、しかし、「日本人にとっては深
刻な悩みであり、患者さんの話を単
に聞いているだけでは、この深い悩みに
気づくことができないのです。理由に
ついてよく聞き出すことで本当の悩
みを理解することができるとだと思
います。治療によつて乾癬が改善した
ので「これでお米が研げますね」とお
話したら、「よく覚えてくれていまし

いただくことが良い関係作りのポイン
トだと思います。

進歩する乾癬治療 未来に期待し、勇気ある 1歩を踏み出す

新井先生：書籍やインターネットを通
じて受診したい医師を見つけたら、一
度、その医師の診察を受けてみるこ
です。悩んでばかりだと、自分の殻に閉
じこもり動けなくなってしまうので、
まずは動いてみる。1歩を踏み出
す勇気をもつてもらいたいですね。治
らないと諦めていた皮膚症状が、治療
することで「こんなに良くなるのです
ね」というくらい改善する方もいま

たね」と、とても喜んでいただけまし
た。「この医師は自分の悩みを理解し
覚えてくれている」、患者さんにそう
思っていただけのこと、患者さんと
医師の信頼関係を築く上でとても重
要なことです。

添川さん：先生が病状や悩みをよく
把握してくれていると、温かく見守ら
れている気がして、病院に行くのが楽
しみになります。

新井先生：医師は今の治療が停滞し
てきたときに、代わりとなる治療を2
手先くらいまで患者さんに提示して
おくことも重要で、あなたのために行
える治療は他にもありますよ」と示す
ことで希望を持ってもらえます。また、
初診のときに時間を取つて話をするこ

最新の治療ができる医師を訪ねてみ
ると人生が変わるかもしれません。

添川さん：あと乾癬を抱えていても
楽しく生きることは大切で、うつうつ
としていると人は離れていきます。辛
い病気を抱えていても、気丈に明る
く生きている人には魅力があります。
幸いにして乾癬は命を奪うような病
気ではなく、それは未来があるといふ
ことです。だから、生きていれば少し考
え方を変えるだけで楽しみは見い出せ
ます。また悩みがあつたら、患者会を
訪ねてください。凍り付いた心が溶け
ていくと思います。

新井先生：乾癬治療は大きく進歩し
ています。それだけに、患者さんは未
来に期待して良いと思います。

殻に閉じこもらず

まずは動いてみることも

大切だと思います。



わたしたちは 乾癬をこう診る。

— 心療内科 心療皮膚科 皮膚科 —

東邦大学
心療内科 教授

はしろクリニック
院長

名古屋市立大学病院
皮膚科 講師

端詰 勝敬 先生 × 羽白 誠 先生 × 西田 絵美 先生

各診療科における 乾癬治療の現状

端詰先生：乾癬といえば皮膚症状を中心とした病気として知られていますが、心療内科にも皮膚科から患者さんが紹介されてくることがあります。その理由として、乾癬はストレスの影響を受けることもある病気のため、皮膚症状の治療と並行して心療内科の治療を必要とする患者さんがいらっしゃるからです。また日本では欧米ほど患者さんの数は多くありませんが、我々心療内科医が注目している病気のひとつです。

羽白先生：私は皮膚の病気と患者さんの悩みなどの問題について治療するために、心療皮膚科を診療するクリニックを開業しています。乾癬の患者さんで心身症的な悩みを抱える方は、蕁麻疹やアトピー性皮膚炎の患者さんほど多くはありませんが、当クリニックにも来院されます。欧米で乾癬といえば、心身症との関連が深い疾患として受け取られることもある病気ですが、日本と欧米ではストレスに対する受け止め方が異なるため、日本では心療内科を受診する病気という認識は少ないかもしれません。

西田先生：私の場合、勤務施設の特徴から日常的に乾癬の患者さんをおくさん診察しています。受診する患者さんは、男女ともにほぼ同数で、結婚や就職、出産などを機に、皮膚をきれいになりたいと訴えて受診される女性もいらっしゃいます。また、乾癬による悩み事を抱える患者さんを診察する機会も多く、その中には精神的にかなり追い詰められた方もいらっしゃいます。例えば、治療のために会社を辞めてしまった方などは、社会復帰いただくことを目標に心療内科と連携して治療を行うことがあります。

身近な不満の解決も ストレスの 解消につながる

羽白先生：日々の診察において、乾癬の患者さんから外用剤についての相談をよく受けることがあります。中でも「塗るのが煩わしい」とか「紙を触ると軟膏の油がついて困る」といった日常的な相談が多いですね。他人から見れば、「それほど困ること...?」と感じるかもしれませんが、長年にわたり乾癬の治療をしてきた患者さんにとれば、けっこうなストレスになっていきます。そこで、私はこのような患者さんには、その時々症状や相談内容に合わせて、塗りやすい外用剤を検討したり、1日1回塗布ですむ外用剤に切り替えるなどとして、ストレスを少しでも軽減することに努めています。

西田先生：私の場合は、顔や手などを、目立たないようにしたいと希望される患者さんが多いですね。頭皮に症状が出て美容院にも行けず、セットやカットに困っているという若い女性も結構いらっしゃって、大きな悩みになっているようです。また、女性に限らず男性でも顔や頭皮に症状が出る早く治してほしいと考えられています。あと相談を受けることとしては、冬場には色の濃い上着やコートを着る機会が増えるため、フケのような鱗屑が目立ちやすく周囲の目が気になるというものです。患者さんがご自身の乾癬のどの症状を気にされているのか、バツと見ただけではわからないこともあります。ご本人の「希望や悩みを話していただければ、治療をうまく行っている関係がつかれると思います。」

端詰先生：医師に相談される患者さんが少ないのは、遠慮しているということもあるでしょうが、他にも日本人の我慢強さが関係しているように思います。日本では多少不便なこと



患者さんに薬の使い方についてもっと知っていただく必要があると思います。

名古屋市立大学病院
皮膚科 講師

西田 絵美 先生

乾癬をはじめとする炎症性皮膚疾患、光線療法、小児皮膚科を専門とする。多くの患者さんの診療や治験を含む臨床研究の経験を通じて、トップクラスの医療を提供すること、すなわち皮膚科のことなら何でも協力できるような幅広い診療体制をモットーとしている。



があっても我慢するという風潮が強く、患者さんがストレスの影響を自覚していても、生活をする上で仕方がないと思っているのではないのでしょうか。私は、皮膚を治療するのと同じようにストレスに対する治療や対処を行うことで、もっと症状が改善する人はいると思います。

羽白先生：そうですね。患者さんが抱いている身近なストレスを軽減することも大切なことだと思います。「患者さんの話を伺っていると、」思うように体を洗ったり拭いたりできない」とか、「入浴に時間や手間がかかる」といった不満を訴える方が意外に多いものです。乾癬の場合、そういったストレスがあるとさらに症状を悪化させるため、このような小さな不満について、患者さんと一緒に解決していくのも主治医の務めだと考えています。西田先生と同じように、患者さんにはもっと質問をしていただきたいと思っています。

西田先生：患者さんの中には、頭皮をくしでガリガリにする方、また入浴時に体をこすって鱗屑を垢のように取ってしまう方などがいらっしゃいます。鱗屑を無理にはがすと点状に出血したり、ケプネル現象※によって乾癬の症状がさらに悪化してしまうので、止めていただくようにご説明しています。本人

患者さんはもっとご自身を出してもよいですよという啓発を考えています。

東邦大学 心療内科 教授

端詰 勝敬 先生

患者の立場にたった医療の実践が心掛けており、全国でも数少ない、リラクセーションを取り入れた心身症の治療をおこなっている。お酒類、特にビールとの関係性は良好で、毎日少しでも楽しむ時間を持つよう、自らのリラクセーションにも力を注いでいる。



は習慣となっていて、つい無意識のうちにやっています。つまり、

※ケプネル現象：症状の無い皮膚に物理的刺激を与えると、その部分に発疹が出現する現象。

望まれる乾癬のさらなる啓発

羽白先生：今後、乾癬治療に望まれることについて、私は、乾癬でも、よりよい生活を目指すことができる、そのことを患者さんにわかっていただくことだと思っています。乾癬のように経過の長い病気では、治療疲れによって意欲が低下してしまう時期があります。皮膚の症状が一向に改善しないという悩み、「一生が台無しだ」とか「結婚できないのでは」など、悲観的に思ってしまう患者さんも少なくありません。そうではなく、乾癬になっても快適に暮らしていける方法があることを知っていただきたいですね。

端詰先生：私は患者さんの皮膚を直接治療するわけではないので、心療内科の立場でどのような啓発ができるのかについて話しをします。

先ほど日本人はストレスや不満をあまり口にしない傾向が強いとお話ししました。悩みや不安を耐え忍ぶ文

化がありますので、辛くても淡々とものごとを進めます。しかし、行動的には、引きこもりがちになったり、対人関係にひずみが出たりするわけです。そこで、患者さんにはもっとご自身を出してもよいですよという啓発ができればと考えています。例えば、患者会のような自助グループ等に参加し、直接、悩み事を相談しあう場を活用するといったことも大切と考えています。

西田先生：乾癬は皮膚疾患の中でも、患者会の方が全国各地で活動されており充実しています。定期的に学習会や懇親会などを実施されているので、ご活用いただければと思います。また、基本的なことではありますが、患者さんに薬の使い方についてもっと知っていただく必要があると感じています。薬は正しい方法で使うことが効果の発揮につながり、特に塗り薬は正しい塗り方で皮膚の状態がとても良くなるケースを経験します。この点については意識的にお伝えできればよいと思っています。

端詰先生：私が乾癬に限らず心療内科の診療で心がけていることといえば、毎回とはいきませんが、診察の時間があるときに患者さんに家の出来事とかを聞くようにしています。そうすると、ぼろっと家庭の悩みを

乾癬になっても快適に暮らしていける方法があることを知ってほしいですね。

はしるクリニック 院長
羽白 誠 先生

日本皮膚科学会認定専門医のほかに日本心身医学会認定心身医療専門医・指導医を持ち、皮膚科と心療内科を併せた治療を行う。現在日本皮膚科心身医学会理事長を務めている。心療内科・心療皮膚科は完全予約制。



打ち明けたりしてくれず、必ずしも病気のことでなくてよいと思います。患者さんともに生活されている「家族やご友人に置き換える」とすれば、特に構えることなくいろんなことを話すことができるように声をかけるだけでいいように思います。それだけで患者さんのストレスに好影響を与えていると思います。



アトピー性皮膚炎などと比べると、乾癬の患者数は多くない上に、認知度はまだ低く、名前の響きから感染する病気と間違われることもしばしばです。乾癬患者さんが周囲への理解を求めながら、乾癬と向き合うことは容易ではないかもしれませんが、一方で、乾癬の患者会の活動は会により様々ですが、参加してみることで、乾癬という病気について学習する機会のみならず、患者さんに会い率直に悩みを打ち明けることもできます。近隣で開催されている患者会に参加してみたり、家族や医師など周囲でサポートしてくれるいろんな仲間と悩みを打ち明けてみたりすることが前向きに乾癬と向き合っていくためのヒントになるかもしれません。



お部屋の乾燥は、お肌にも影響を及ぼすため、できるだけ加湿を心がけたいもの。しかし、加湿器は水を補充したり、清潔にしないとカビが発生したりとお手入れにも気を使いますね。家の中に観葉植物を置くと、

天然の加湿対策にもなるのです。綺麗な緑の植物は、インテリアにもなり、さらに加湿もできるなんてまさに二石二鳥ですね。

LIFE

暮らしをちょっと心地よくするために、視点を少し変えてみませんか？

3種のグリーン

グリーンインテリアとしての役割を果たしてくれる観葉植物。観葉植物に与える水も勿論ですが、根から吸収した水分を葉から蒸発させる蒸散作用を持っています。観葉植物をインテリアとしてお部屋に置く場合は、



玄関にも、グリーンをひとつ

玄関にもひとつ、観葉植物を。玄関の戸を開けて、緑が目に入ると印象も明るく、清潔感が漂うだけでなく、靴のにおいがこもりやすい玄関の消臭も期待できます。玄関に太陽の光が入りにくい場合は、日陰でも育ちやすいタイプを選びましょう。玄関に観葉植物を置くと、水をくめる場所まで少し距離があるため「つい、水やりを



相性のいい ページュ系のタオルを室内干しで加湿

部屋に観葉植物のグリーンを置いたら、ぜひ、相性のいいページュ系の布



巾やクロスを揃えて、室内干ししてみてください。部屋に濡れたタオルなどが、干す布の色をお部屋の印象と合うもので揃えたり、干す物にもこだわること、室内の「ちゃーこちゃー」した生活感を消すことができます。また、いつでも手に取れて、使ったらすぐに干せるクロスがあることは、チリやホコリをさっと拭き取るのにもとても便利です。

住

[LIVING] 乾燥対策に、緑のインテリアを使って。

インテリアコーディネーター Teruさん 「すぐできる、暮らしやすい部屋作り」をテーマに、簡単におしゃれにできるインテリアを提案。多くの女性から支持を集めている。

COMIC ESSAY

乾燥と歩んでます。【爪乾燥編】

監修：東京通信病院 副院長兼皮膚科部長 江藤 隆史 先生 漫画：あくつじゅんこ



爪に症状が現れる爪乾燥は、その症状が爪白癬(爪水虫)に似ているためよく見極めることが重要です。

爪白癬は足の親指など一部の爪に症状が出るのに対し、爪乾燥はほぼ全ての爪に症状が現れる特徴があります。ご自身で判断せずに、病院で診察を受けましょう。爪乾燥は乾燥性関節炎を伴いやすいことが知られています。指が腫れたり筋骨や腰、足首、かかと等に痛みを感じたら、主治医に相談しましょう。

「みんなで学び・みんなを支える」 — 日本乾癬患者連合会 —



● 乾癬と共に生きる仲間を応援

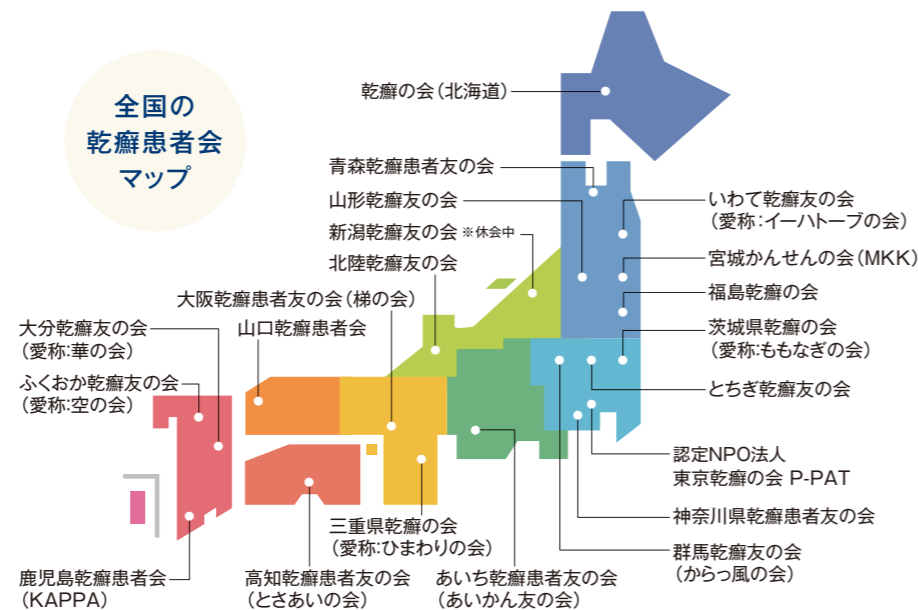
日本乾癬患者連合会 (JPA) は、平成21年、相談医の先生方のご協力のもと乾癬とその治療についての正しい知識の習得、社会における乾癬の認知度を高めることや患者さん同士の交流の場を提供することを目的に、全国の患者会が集まって組織されました。今では活動拠点が21地域にまで増え、それに伴い乾癬という病気に対する社会の認識もずいぶん変わってきたと感じています。今後も、JPAは全国の患者会と協力して、さらなる乾癬の啓発を行い、乾癬患者さんが少しでもストレスのない社会生活を送ることができるように取り組んでいきたいと考えています。

JPAが取り組む主な活動

学習会・交流会	毎年9月に開催される日本乾癬学会学術大会にて、JPA主催の学習会を開催しています。学習会では乾癬治療・研究の第一線で活躍している先生による講演や質疑応答が行われます。 [主な参加者] 患者さんやご家族、学会参加中の医師 ※学習会終了後の交流会は、どなたでもご参加いただけます。
啓発活動	日本乾癬学会学術大会、日本皮膚科学会総会等で患者会ブースを設営し、医療関係者への啓発活動を行っています。また、WebサイトやFacebook等で、乾癬にまつわるトピックスやイベント等の情報を発信しています。
国への働きかけ	乾癬患者さんのQOL (生活の質) 向上のため、新しい乾癬治療薬の早期承認や乾癬性関節炎の指定難病選定への要望等、厚生労働省へ働きかけも行っていきます。
各患者会への支援	各患者会の活動支援、情報提供ならびに新しい患者会設立に向けての支援を行っています。

● 全国に広がる患者会

JPAと密接に連携しながら全国に広がる患者会では、各患者会独自のアイデアを活かしたイベントを開いています。たとえば、10月29日の「世界乾癬デー」付近の学習会開催、情報誌の発行、患者さん同士が和やかな雰囲気でお話する懇親会や、女性独自の悩みに応えるセミナーなどが挙げられます。このような活動を通じ、乾癬患者さんの孤立を防ぎ、乾癬という病気と生きる勇気を共有できる場作りを提供できるよう努めています。



● 海外の患者会との交流

JPAは、国際乾癬患者団体連合 (IFPA) と連携をとり、海外の患者会の情報を積極的に収集し日本国内に情報発信をしています。また、日本の患者さんの体験談等を動画にのせて世界へ発信もしています。

乾癬でお悩みの方や、ご家族やお知り合いに乾癬で困っている方がいらっしゃいましたら、是非一度、日本乾癬患者連合会 (JPA) にご連絡ください。

お問い合わせ先 日本乾癬患者連合会ホームページ (<http://jpa1029.com/>) の問い合わせフォームまたはお近くの患者会まで



Make our dreams come true!

INSPIRE JAPAN WPD PROJECTが 患者による『日本初』の 10.29 世界乾癬DAYイベントを開催!

日本では一般にはあまり知られていない乾癬という疾患について、もっと知ってもらおうという認知度向上のための世界乾癬デーイベントが2017年10月29日に東京タワー2階フットタウンで開催されました。

この日は台風22号 (サオラー) が日本列島を襲い東京も朝から土砂降りというあいにくのお天気でしたが、イベントの主催者であるINSPIRE JAPAN WPDプロジェクトのメンバーら6人と、応援に駆けつけた各地の患者会のメンバー、医療スタッフ、応援企業からのスタッフ等、多くのボランティアと一緒に東京タワーを訪れた観光客に「乾癬という疾患をご存知ですか? ぜひ知ってください!」と声をかけながら乾癬啓発リーフレットなどを配布しました。

主催者の代表である奥瀬正紀氏によると、この日は「約5000人の東京タワー展望台へ上った来場者のうち約3000人が展示スペース前を通り展示に目を配り、1000人の方がリーフレットを受け取って下さった。また「乾癬を知っていますか?」というアンケートには約120名が回答してくれました。」とのことでした。イベント会場では展示の他に、乾癬に関するトークショーが3回開催され、その全てがYouTubeによる生中継で全国へ配信されました。最後のトークショーには、熊本での学会に参加されていた照井正先生 (日本大学医学部皮膚科学分野 教授) が熊本から駆けつけて飛び入り出演。さらに終盤にはモデルの道端アンジェリカさんもサプライズ登場し、会場は大いに盛り上がりました。

主催者のINSPIREメンバーは、「多くの方の協力で大成功することができました。乾癬で苦しむ人がいない世界をめざして、来年はさらに充実したイベントを開催します!」と張り切っていました。イベントの詳細はINSPIRE JAPAN WPDプロジェクトのHPで紹介されています。
<http://www.inspirejapan-wpd.net>



INSPIRE JAPAN WPDプロジェクトは、2018年4月に一般社団法人となりました。

Make our dreams come true! さっと夢はかなう♡

<http://www.inspirejapan-wpd.net>

一般社団法人INSPIRE JAPAN WPD 乾癬啓発普及協会

